6月号

とこわの森
―とこしえに美しい緑を―

太陽が照り返す暑い日も
木枯らしが吹く寒い日にも
負けないで
「力いっぱい」
強く生き抜く子らに育つようにと
命名した森

この森に　今年も
入学を祝して
スギ　ヒノキを植樹し
常磐南の一年の活動が始まる
「自然は友だち」を
合い言葉として

昭和59年6月1日
編集／発行
岡崎市教育委員会

(「とこわの森」記念植樹―常南小)

＝教育随想＝

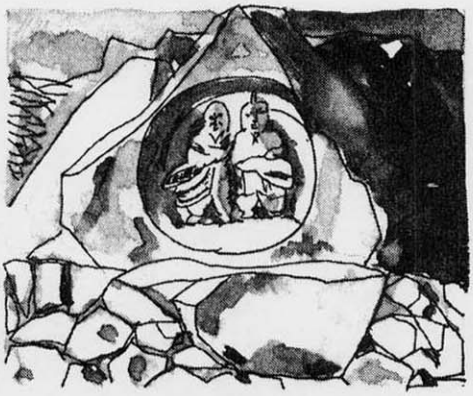
登校拒否は集団生活拒否症

― 学校はなぜ必要か ―

竹内　清

精神科医のY氏が、児童精神医学に関する新著の中で登校拒否に触れ、なぜいやがる子供に登校をさせねばならないのかと書いている。

「学校とは、社会側からみて役に立つ、つまり、社会効用的な、そして、また、社会からみて、危険を及ぼさないよう、つまり、社会防衛的な立場で人間を訓練する役目を負わされているところだ。」



「今は社会が悪い、学校が悪い。学校自体が病巣そのものになっている。」

「登校拒否の子供たちは、この不適切で危機に満ちあふれる状況に対する救助を求め」「大人社会に向けての、その是正を求める訴えをしているのである。」…と続けている。

つまり社会が悪く、学校が悪いから、登校拒否を起こしているのであり、その学校は、大人が都合のいいように、大人の社会に役立つように、子供たちの「主体性を奪い、画一化し」「統制された社会を志向」するものであると言う。

そう言えば、これと同じ意見をあちこちでよく聞く。

しかし、これには二つの間違いがある。その一つは、登校拒否の子供たちの精神状態をよく見ていないこと。彼等は情緒の発達が未熟で、葛藤状態にある。これを見ないということは、精神病理学的診断に欠けることになる。

今一つは、子供自身の内面的発達の一つの要素である社会性の発達について無視していること。社会性は集団生活の中で伸びて行くものであるから、それがうまく伸びているかどうかの発達的診断に欠けていることになる。

このY氏の意見は、登校拒否の子供を見るよりも、今の学校は、子供たちを社会に役立つ人間に作り上げるための統制、管理をするためのものだと、管理教育批判の材料に登校拒否を用いているように見受けられる。

学校は、子供にとって全く必要ないものを、社会の方が一方的に押しつけているというものではない。

子供は成長するにつれて、子供自身の内部に社会性が芽生え、育って来る。つまり、社会性の発達は、子供自身の内面的発達課題として出て来るものである。

この内面的な発達への要求を伸ばし、育ててやる場所として用意されているのが、幼稚園・保育所・学校等の集団生活の場であり、子供の発達段階に応じて、それぞれの教育の内容も方法も変わって来るはずである。

心身障害児は障害の種別や遅れの程度に応じて普通児の発達とは異なって来るので、その発達の程度に応じた特別の場所を用意してやらねばならず、それが特殊教育となる。だから、特殊教育は、心身障害児を確実に一歩一歩成長、発達させるために用意されたものである。

それはともかく登校拒否は、集団生活にうまくなじめず、集団生活がうまくできない「集団生活拒否症」であると言い換えてもよい。こういう点を正しく診断してかからないと、治すことはできないのである。

（愛知教育大学教授）

甘言苦言

部活動

心のハーモニーを

岡崎小学校　長谷川　四郎

部活を指導されている先生方から、よく、部員が少ないとか、部員はいるが練習をさぼる者が多く、全員そろっての指導ができないという悩みを聞かされることが多い。確かに、現場での部活指導はいろいろな点で問題を抱えている。

私も、長い間合唱部の顧問として指導してきたが、この体験から次のことが大事ではないかと思う。第一は、心のハーモニーを大切にし、魅力のある部にするということである。助け合い、励まし合う仲間づくりをすることである。第二に、部としての目標を掲げ、それに向かって計画的に指導していくことである。コンクール、各種の大会に出場し、発表の場をつくることが必要だと思う。第三に、練習時間を厳守し、だらだら練習をしないようにすることである。無駄のない効率的な指導をするためにも、部活日誌をつけるようにするとよいかと思う。

部活を指導する者として、常に心して

和菓子づくり

本沢節也氏

本沢さんのお店「さんり」は、松本観音（松本町）を南に入ったところにある。この道に入ったのが十八歳の時、以来三十七年手づくり一筋である。

「何といっても手づくりの方が心がこもっています。手づくりかどうかは一目見てわかりますよ。心が見えるんですね。まあ、機械に対する反骨精神っていうんでしょうか。」

本沢さんは現在、干菓子づくりと有平細工に力を入れている。干菓子も型を使ってつくるようになり、手づくりをしている店は京都でもなかなか見られなくなっている。有平細工は砂糖を煮つめ、熱いうちに花や葉などに形どり、それを飴菓子にするものである。これをつくる人は京都でも二、三人という。

本物に近い色をどのようにして出すかが、これまでの和菓子づくりで一番苦労したことだそうである。

「色について目が開けたような気になったのは四十代でしたね。子どもが通っていた城北中学校のPTA絵画教室にたまたま出席したのがきっかけでした。その時の講師は鈴木幸生先生でしたが、四、五年やっていると、お菓子の色がわかってきたんです。」

茶道の先生方からの注文も多い。茶席用の和菓子を菓子器に合わせてつくらなければならない。

「菓子器に合った色と形をどのようにつくり出すかが大変です。仕事場には失敗したくずがたくさん出ますよ。」

一徹と自認している本沢さんも奥さんの操さんには頭が上がらない。

「おかあさんがいなかったら、ここまでやれなかったですよ。店番も配達もみんなおかあさんがやってくれましてね。私は店に出ることはめったにありません。仕事場に集中できるんです。」

数年前、本沢さんは大きな病気をして右半身が不自由になった。手づくり仕事が何よりものリハビリテーションになったと笑われる。

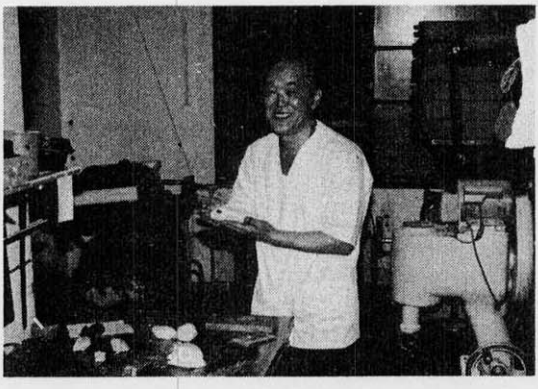
「同じ種類のものを二回くらいつくると、後は同じものをつくりません。自分で飽いてしまうんです。新しいものをつくり出す楽しさが、私をここまで引っ張ってきてくれたんです。」

本沢さんは三代目にあたる。おとうさんは細工物が好きで、盆栽のようなものをつくっては店頭に飾っていたそうである。

「いいものをつくっていれば自然にお客さんが来てくれます。失敗作なんか売りたくありませんしね。小言を言ってもらうのが、一番勉強になります。」

本沢さんの店には同業者の人が和菓子づくりの秘伝を求めてよく訪れてくる。そんな時、本沢さんは気さくに伝授される。自分のもっているものが広まることはありがたいことだと。

〔生年月日　昭和四年五月三日
住　所　松本町一丁目十六番地〕



いなければならないことは、部活指導に熱心な余り学級経営・授業研究への取り組みがおろそかになってはならないということである。

人があって技がある

―水泳指導二十年の体験から―

奥殿小学校

鈴木勘三

「水泳を強くする方法はありませんか。」よく、こんな質問を受ける。そんないい方法があったら、こっちが聞きたい。

「ふだんの授業に熱中すること。それから、病気以外は、立って教えること。」これで分からなければ、もう少し悩んでから出直して来ることだ。悩み抜いた者は、そんな安直な質問はしない。

授業に熱中すれば、子どもは信頼する。部活でともに喜び悩めば、人の心が分かる。人間とはいかなるものかが理解できてこそ、人を教えることができる。

「技」を指導するのに、こういう技があるからこうせよというやり方は、間違いだと思う。子どもがこうだから、この技をこうして教えよう――「技があって人があるのでなく、人があって技があるのだ」という発想が重要ではあるまいか。

立って教えよと言うのも、先生がだらしなく、腰を下ろせば、子どもの心に微妙なかげりが出るからだ。人間とはそういうもの。先生の後ろ姿にひかれるのだ。

後ろ姿の美しい女は、つい前へ回って拝みたい気持ちになる。後ろ姿の厳しい先生には、子どもがついていく気になる。

岡崎再見 ㊼

悠紀斎田

お田植え唄

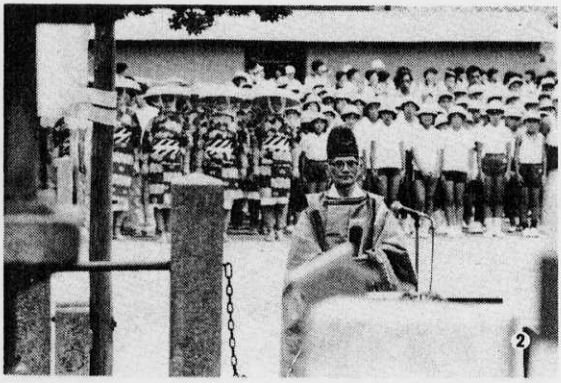
今日のよい日の御田植えはじめ
稲の万歳御世の数
やがて世界のむつみの種も
悠紀の御田より出るように
菅の小笠にそろいのきもの
苗もそろえば気もそろう
三河万歳万歳稲の
穂に穂出るよに祈らむしょ
早苗うえましょ真すぐに植よう
すぐは神様およろこび

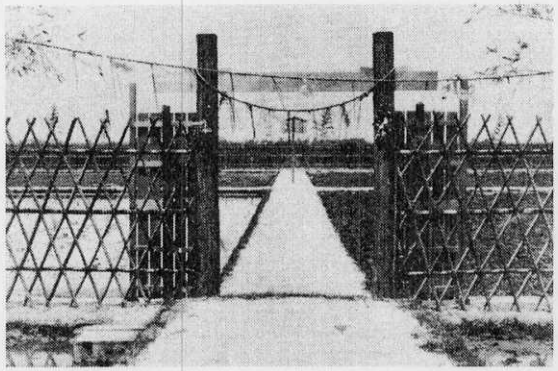
今から七十年前、大正四年六ッ美地区、中島町（当時、碧海郡六ッ美村大字中島）において、大嘗祭悠紀斎田御田植え祭りが行われた。天皇一代の間に一度だけという大祭にお供えする米を作るという国家的行事とあって、県下から七万人余りの参観者を集めたという。西尾線は車両が不足し、貨車まで人でいっぱいになり、道路は車馬の通行を禁止されたと聞く。

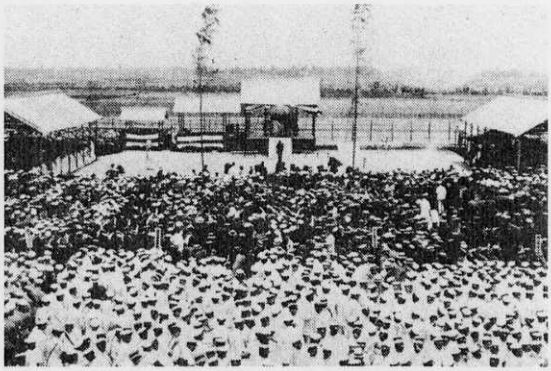
悠紀斎田祭は、昭和四十一年三月、岡崎市の無形民俗文化財に指定され、六ッ美悠紀斎田保存会（早川庚一会長、会員二一八名）の人々を中心として、今もなお受け継がれている。昭和五十五年からは六ッ美中学校、六ッ美南部小学校の児童生徒も参加し、七十年前と同様、お田植え唄やお田植え踊りの披露される中、古式豊かに行われている。

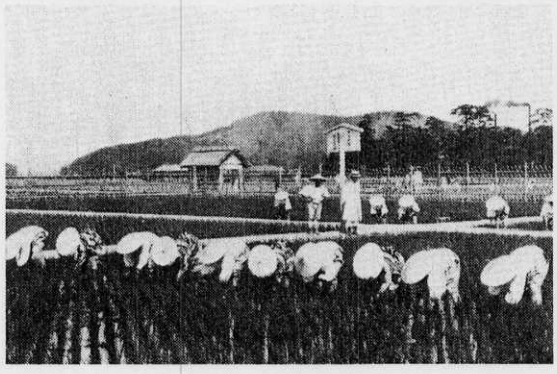
今年は、次のような予定。

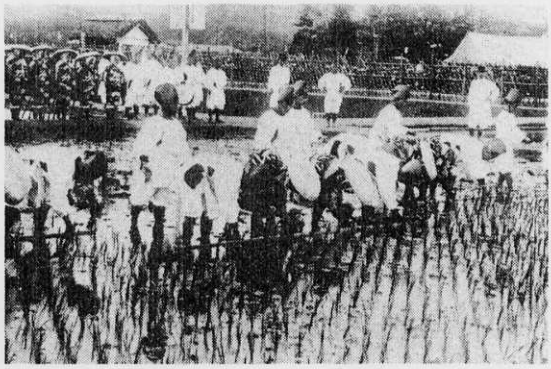
日時　六月十日㈰　午後二時
場所・中島町大正宮
・悠紀斎田
内容　記念式→お田植え踊り
→大正宮から踊りの行進（約五百メートル）
→お田植え式











大正4年 大嘗祭 悠紀斎田

①斎田を囲んで、そろいの装束を身にまとい、太鼓と笛の響きの中で行われる優雅なお田植え祭り。

②お田植え祭りの初めに、中島町大正宮で約三百人が参加する記念式。

③保存会の人たちとともに、六ッ美中学校・六ッ美南部小学校の子どもたちも参加するお田植え踊り。

④大正宮から悠紀斎田までの約五百メートルを古式豊かに行進。

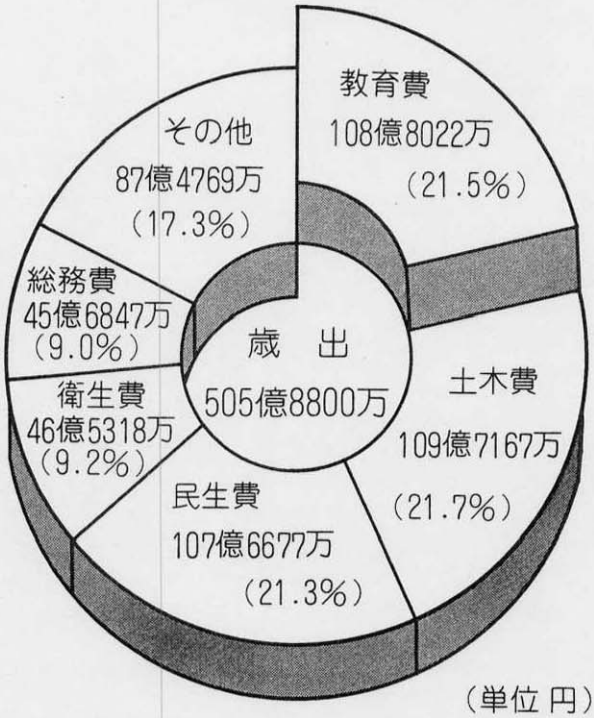
⑤行進の後、斎田でお田植え唄を歌いながら行われる伝統的なお田植え式。

⑥実りの秋、斎田の稲は収穫され、大正宮に奉納。

岡崎市の教育予算

〝夢と希望に満ちた教育と文化をめざして〟

〈一般会計歳出〉

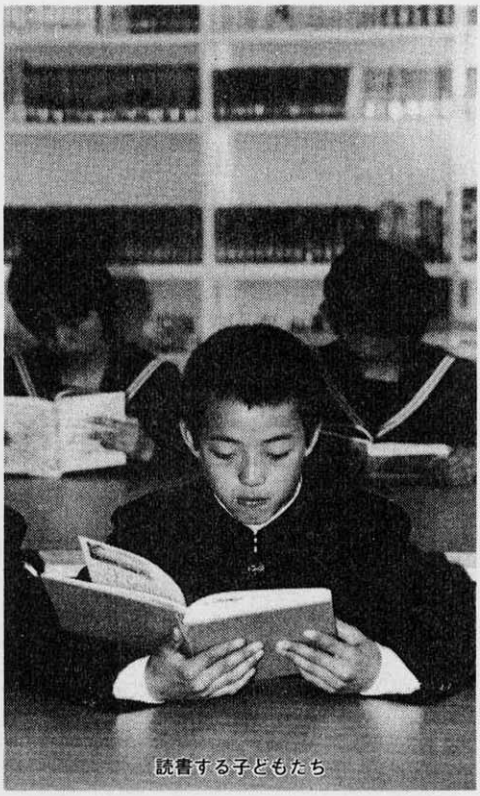


（単位 円）

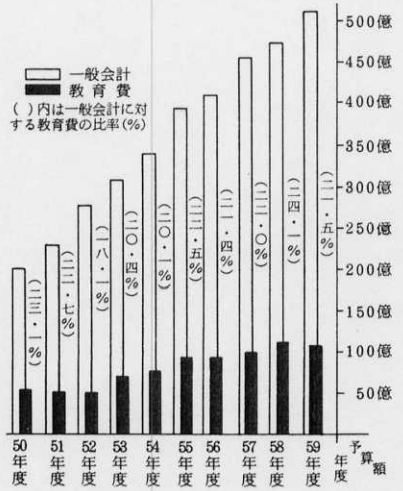
ズームアップ

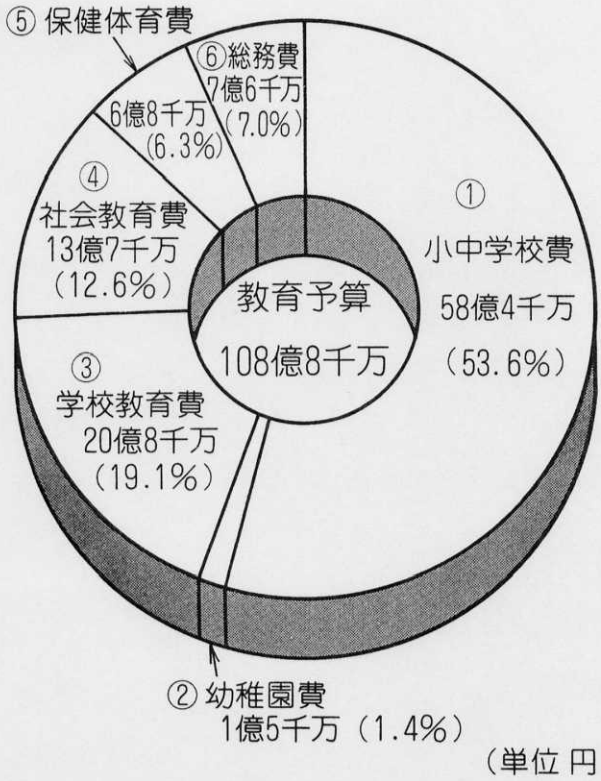
①義務教育施設の整備として、昨年度二校、本年度一校（北野小学校）を新設
②校舎増改築は小学校六校、中学校一校・屋内運動場建設は小中学校各一校・プール建設は小中学校各一校・クラブハウス建設は中学校三校
③地域文化広場の建設
④「心の電話おかざき」の充実
⑤「ハートピア岡崎」の策定
⑥「こどもとみどり」刊行
⑦市史編さん事業
⑧視聴覚ライブラリーの運営

新設された屋内運動場

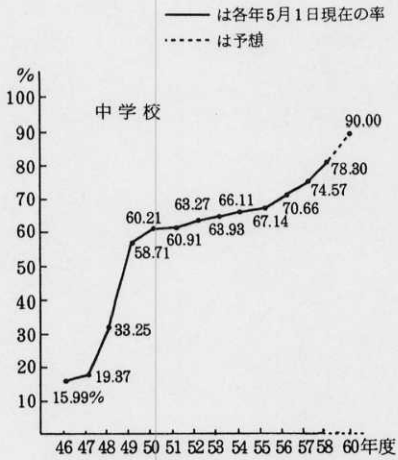

読書する子どもたち

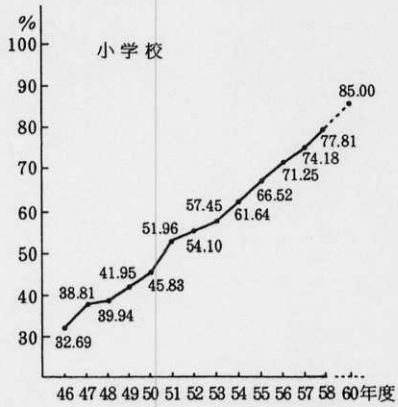
◆一般会計と教育費の推移（予算額）◆





◆校舎鉄筋化率の推移◆





①小中学校費
- ○昭和59年度義務教育施設整備
  - • 小学校新設（北野小学校）
  - • 校舎増改築（羽根小，愛宕小，常磐小，大門小，矢作西小，六ツ美南部小，矢作北中）
  - • 屋内運動場建設（小豆坂小，新香山中）
  - • プール建設（小豆坂小，新香山中）
  - • クラブハウス建設（葵中，東海中，新香山中）
  - • 夜間照明設備設置など。
- ○教育用備品充実

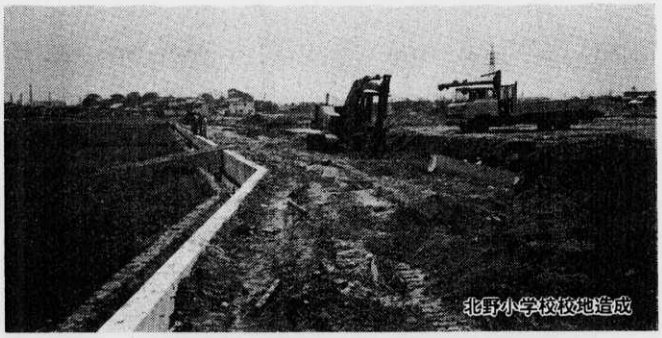
②幼稚園費

③学校教育費……学校給食センター費，学校保健費など。

④社会教育費……図書館の充実，地域文化広場の建設など。

⑤保健体育費……運動広場，スポーツ開放など。

⑥総務費……市史編さん事業，私学振興費など。


北野小学校校地造成

あいさつのできる子に

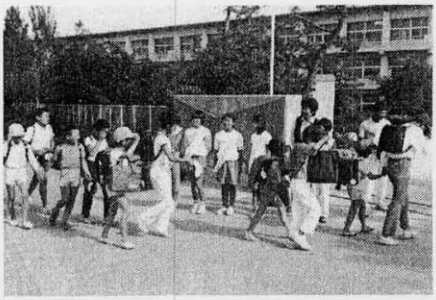
緑丘小　山本　頼永

「おはよう。」

「おはよう。」

子どもたちの甲高い声が、校門に響く。児童会の役員と集団登校の子どもたちが校門で交わす朝のあいさつである。

「おはよう」とか「こんにちは」というあいさつは、幼い子でも知っていることばであるが、これを気持ちよく口にすることは案外難しく、一朝一夕では身につくものではない。本校の児童会では、ここ数年来この問題をとりあげ、役員が先頭に立って範を示すことで、その習慣化を図ってきた。今年も新役員による児童会が発足し、その最初の活動として提案されたのが、この「あいさつをしよう」という運動である。



軌道に乗るまでは、私も児童会の役員と一緒に校門に立ってしばらく様子を見ることにした。

「K君、おはよう。」

「……。」

「Sさんおはよう。」

「おはよう……ございます。」

寝坊をして集団登校に間に合わなかったのか、てれくさそうに下を向いてそそくさと通り過ぎる子、出掛けに問題を起こして母親にでも叱られたのか、目のまわりが涙でぬれている子、恥ずかしそうにやっと聞き取れるほどの小さな声であいさつをしていく子。かと思うと、はちきれんばかりの怒鳴り声をあげてあいさつをしていく子など……。

奉職して以来、下校時に子どもを送ることはあっても、校門に立って子どもを迎えるということはなかっただけに、登校時の子どものさまざまな表情をとらえることができたのは幸いである。

「おはよう。」

「おはよう。」

八時を過ぎるころ、校門はあいさつで活気に満ちる。

このごろでは、自分から先にあいさつをする子も数を増してきた。新一年生も班長にならって少しずつできるようになっている。

地味な活動ではあるが、毎日毎日繰り返して行うひとことが「あいさつのできる子」を、ひとりでも多く育てることになるのではなかろうか。

掃除大好き

愛宕小　小出　明

「えっ。うそ！。」

「本当なら、たいしたものだ。いや、早まってはいけませんよ。次をお読み下さい、次を。

「早よう掃かんか。」

「時間もうないぞ。」

鬼軍曹の叱咤にも、遊び道具のグローブとボールを持って、遅れて掃除場に来た当番の子の動きは鈍い。

ところが、掃いても掃いてもたまる落ち葉をアスレチックの広場で燃やし始めて、動きが変わって来た。もちろん、燃やす間、掃除は休み。鬼軍曹も、どんどん枯れ葉を燃やす子、しゃがんで火に手をかざす子と一緒に、

「よう燃えるなあ。あんまり火を大きくしてはいかんぞ。」

と、にこにこしている。

「こんなにたき火ができるなら、『やき芋』やるかな。」

「先生、さつまいも？」

「そうだ。うまいぞ。」

「芋いっぱい家にあるよ。持ってこよっと。」

枯れ葉の山が広場に大きなごみの山となって一週間。山も小さくなったころ、二十五人のクラス全員が、さつまいものまる焼きを口にした。こげて炭になったのもあったし、小さいのもあったが、文句は出なかった。

時は前後するが、次のようなことも掃除中にあった。

さっきから、紅色をした黒光りする大柄な蜂が、羽をふるわせながら、木の間を動きまわっている。新緑に包まれた、うす暗い遊歩道の掃除を、皆黙ってやっている時の事である。

うす茶色の物体が、落ち葉の上をそれこそ転がるように道を跳び越え、下の茂みに突っこんでいった。それまで、あっちこっちしていた紅色は、ジグザグに茂みに迫まりながら、三十センチぐらいの所から跳びかかって茶色のクモを捕えた。理科好きな男の子にかかってその正体がわかった。その名は、「オオモンクロベッコウ」。次の日から、何となく、掃除がきれいに早くやれたような気がする。

もうお分かりでしょう。題名は、まっかなうそである。でも、楽しみながら、求めながら掃除をしたことは確かだ。教えるのも大切だが、事に当たる姿勢を育てることがもっと必要だろう。

【寄贈刊行物・資料等】

◆感動ある授業の創造　緑丘小
B5　二九五ページ

◆甲山教育の姿　甲山中
変形B5　一三八ページ

◆はねっ子文詩集　羽根小
A5　二二六ページ

◆学校づくりの話No.6　城北中
B6　一六一ページ

◆矢北中のあゆみ　矢北中
B5　七〇ページ

◆やまなか（学校文集）　山中小
B5　一九二ページ

◆主体性を高める学習指導
B5　一一四ページ　美川中

南中の緑化、初の内閣総理大臣賞

―基盤に全市ぐるみの学校緑化推進活動―

多年にわたる緑化活動の推進について、顕著な功績が認められ、南中学校が、「昭和五十九年度緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰」を受けた。表彰式は、五月二十九日、総理大臣官邸で行われ、中根清巳校長が出席した。

政府は、昨年「緑化推進連絡会議」を設置し、「緑化推進運動の実施方針」を定めた。南中学校の受賞は、この「実施方針」に基づき、全国の個人ならびに団体から選考されたもので、栄えある第一回の受賞である。

南中学校では、開校以来「緑を育て、緑に学ぶ学校づくり」を目標にかかげ、生徒・父兄・教師が一丸となっての緑化活動を推進し、県下における「全日本学校環境緑化コンクール」特選初受賞校（昭和三十六年）となった。さらに、この度の受賞は、「岡崎市小中学校環境緑化推進委員会」の「緑の銀行」活動によるところが大きい。

■細川小にFBC春花壇大賞

昭和五十九年度、フラワー・ブラボー・コンクール春花壇の審査で、細川小学校が県下参加校百十六校の中から、〝大賞〟に決まった。表彰式は六月十四日、県庁で行われる。

■前期教育実習

五月二十八日から前期教育実習が始まった。受け入れ校及び実習生の数は次の通り。

▽甲山中＝八名▽南中＝九名▽竜海中＝一一名▽葵中＝一〇名▽城北中＝七名▽福岡中＝四名▽岩津中＝八名▽矢作中＝七名▽矢作北中＝七名▽藤川小＝二名▽福岡小＝二名

■昭和59年度月報編集委員

・安藤　幸夫（矢西小）
・和出　昭夫（恵田小）
・渋谷　環（緑丘小）
・遠山　賢治（城北中）
・成田　邦彦（常南小）
・平野　安世（連尺小）
・有我　亮介（南中）
・熊谷　満義（常磐小）
・竹内　昭次（新香山中）
・白井　正壮（本宿小）
・梶尾　長夫（竜海中）
・八田　昌子（三島小）
・中川　朗子（梅園小）
・牧野伊佐夫（市教委）
・杉浦　博司（根石小）
・杉本　佳子（福岡中）
・鈴木　由郎（矢北中）
・鈴木　栄二（矢作中）
・岡田　豊（河合中）
・野田　光宏（岩津中）

59年度　●児童・生徒数・教職員数の実態

59．5．1現在

区分	学校数	学級数（特殊）	児童・生徒数			校長・教頭・教員数（非常勤講師を含む）			養護教員		事務職員		栄養職員
			男	女	計	男	女	計	県	市	県	市	県
小学校	40	840(35)	14,996	14,477	29,453	523	530	1,053	42	0	45	24	8
中学校	15	347(16)	7,153	6,773	13,926	405	173	578	15	0	20	7	0
合計	55	1,187(51)	22,149	21,250	43,399	928	703	1,631	57	0	65	31	8
58年度計	54	1,114(50)	22,063	21,027	43,090	933	665	1,598	56	0	60	27	8

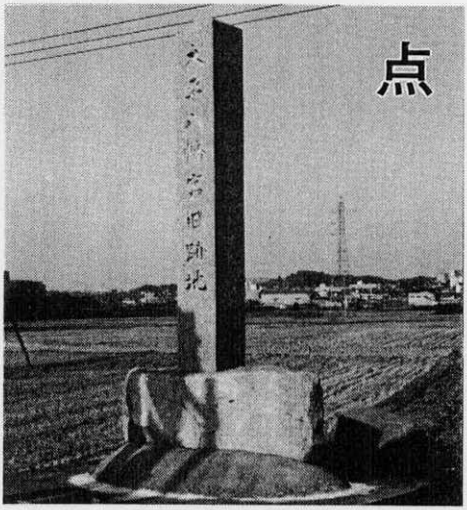
●学年別児童・生徒数

小学校								中学校			
学年	男	女	計	学年	男	女	計	学年	男	女	計
1年	2,254	2,220	4,474	4年	2,606	2,503	5,109	1年	2,557	2,443	5,000
2年	2,448	2,181	4,629	5年	2,681	2,583	5,264	2年	2,401	2,261	4,662
3年	2,385	2,431	4,816	6年	2,602	2,559	5,161	3年	2,195	2,069	4,264

●学級・学校の規模

	小学校	中学校
1校当たり児童・生徒数	736人	928人
1校当たり学級数	21学級	23学級
1学級当たり児童・生徒数	35人	40人

点



大平八幡宮旧跡地

所在地―岡崎市大平町

大西と大平を結ぶ御用橋から東へ二百メートルほど、道路の左手の水田の中に、人の背ほどの高さで二十センチ角ほどの石柱が建っている。「大平八幡宮旧跡地、昭和五十一年十月吉日建之」とある。

ところで、その大平八幡宮はここからほぼ北方八百メートル、国道一号線と旧道との分岐点近くの小高い丘に鎮座する。一の鳥居から桜の並木を抜け、何段かの石段を登ると、立派な社殿と広い境内が見えてくる。

八幡様の社殿の左には、天神様の祠をはじめ、いくつかの小さな祠がある。筆神様の石の祠もありなかなかにぎやかである。

この地の字名は大平町天神前、実はここはもともと天神様のやしろであった。八幡宮は安永六年、前記、大平町八ツ幡からここへ遷座したのである。八幡様は、いわば、神様の正統派。明治に入って村社に、そして、同四十年には神饌幣帛料供進神社にと昇格し、社殿も立派になっている。天神様は軒を貸して、母家を取られた形で、何かみじめである。

石柱は、もともと標石が置いてあったのを、神社総代の方々によって新しい石碑に建てかえたものだそうである。

●カット　岩津中　田中久子

オアシス

「おはよう」小鳥のさえずりに目ざめる〝自然の家〟の朝はさわやかだ。

ここ須渕は、県下でも珍しいグンバイトンボの多産地として知られている。

雄の四本の足に白い軍配状の毛が密生していることから、この名がある。

グンバイトンボの清楚な姿が今年も見られる季節となった。

新聞の活字で目覚め、テレビのニュースで眠っている頭脳をたたき起こす。めまぐるしく変化する情報社会の様相を、いち速くとらえようとする現代人の常識。

それぞれの社会に即応できるような社会人育成のために、聞く力・読む力が必要欠くべからざる能力なのだ。

「後継ぎ」「後取り」という言葉に古めかしさを感じるのは私だけであろうか。

特集の取材のために悠紀斎田保存会の方々にお会いする機会を得た。今、会の皆さんの頭痛の種は「後進の指導育成」であるという。郷土の文化財を守り育てるのは、次の時代を担う若者たちであることを忘れてはならない。

すずらんや葉蔭に咲いて隠れがち
鬼城

鈴蘭はユリ科の多年草で、匂いのよい白い小花を房状につけて咲く。

ふと、学級の子ら、一人ひとりを想う。とかく元気旺盛な子たちが目立つが、この鈴蘭の小花の如き、性格や行動の子を見落とさない眼が教師に求められよう。

この本を

＊学問の創造　福井　謙一
校成出版社　1100

＊人を活かす　坪内　寿夫
講談社　1000

＊ハ虫類になった日本人　西村　五洲
ＰＨＰ研究所　500

＊病いと人間の文化史　立川　昭二
新潮社　780

＊五人の天使を胸に　早川教示著
労働旬報社　980

分からない子の“分からなさ”を，解せない悔恨に襲われることは，誰もが経験する。

著者は12年間普通学級担任として自分を鍛えてきたつもりであった。ところが，特殊学級を担任して自らの甘さを痛感する。

「子どもと同じ目の高さに立つことを怠ると，子どもの心は閉じてしまう。」すると，差し出した指導の手が拒絶されてしまう。そんなできごとに遭遇するたびに，著者は“分からなさ”に挑戦しようと意欲的に実践にうちこむ。

なかなかに示唆に富む本である。